

## 15世紀琉球古刺繍の検証に向けて

## —元寇史料館所蔵の伝・モンゴル型鎧にみられる刺繍—

寺田 貴子

For verification of the 15th century Ryukyuan embroidery;  
Embroidered armor of the Genko Historical Museum

TERADA, Takako

## Abstract

In October 2021, the author visited Genko Historical Museum (元寇史料館) in Fukuoka to observe the armor of Mongolian warriors in order to obtain information on the verification of Ryukyuan embroidery in the 15th century. The armor is said to be of the late 13th century. Some of the embroidery techniques used in the armor was similar to those found in embroidered costumes and fabric fragments that remain in Okinawa Island, Izena Island and Amami Island.

キーワード； 琉球古刺繍、元寇史料館、モンゴル型鎧

Keywords; Ryukyuan Embroidery, Genko Historical Museum, Mongolian Armor

## 1. はじめに

琉球文化圏の各地には、15世紀ごろに製作された、主に神事に用いられた刺繍品がいくつか伝世している。すべて製作者や製作地は不明で、刺繍技法に関する歴史的な記録はもとより技術の継承もなされていないことなどから、それら琉球古刺繍の発生や伝播の経路については未解明である。

筆者は、2005年から琉球文化圏にのこる刺繍資料にみられる刺繍の種類と技法を明らかにするとともに、その系譜を検証する手掛かりを得ようと、国内外において調査研究を行ってきた<sup>1)~20)</sup>。前報においては<sup>19)</sup>、サハリンのウイラタ民族の古い刺繍技法が琉球古刺繍の主要技法である「琉球千鳥繡い」に似ることや、13世紀から16世紀にはサハリンの諸民族と元・明朝との朝貢関係や大陸の諸民族との交流が展開され、ウイラタの居住地とみられる兀列河(ウリエホー)衛は、少なくとも15世紀末~16世紀初頭ごろまでは明朝との朝貢関係が続いており<sup>21), 22)</sup>、琉球も同様に中国と朝貢関係にあったという歴史的視点での類似性も報告した。

本稿では、2021年10月に行った、福岡市にある元寇史料館が所蔵する、13世紀の元寇資料とされる「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍に関する閲覧調査の結果について述べることにした。

## 2. 背景

現存する琉球古刺繍の資料で、年代測定がなされたもののうち最も古い資料は、尚円王(在位1469年~1476年)が神女(ノロ)である姉へ下賜したとされる「伊平屋阿母加那志の繡衣裳(絹黄色地花鳥紋衣裳)」で<sup>23), 24)</sup>、製作年代が1427年~1472年(確率95.4%)と判明しているものである<sup>17)</sup>。大袖の衣裳全体には鳳凰や植物の紋様が「琉球千鳥繡い」技法を主体として、部分的に平繡い、鎖繡い、まつい繡い、上掛け繡いなど、5種類の技法を用いて刺繍が施されている<sup>15), 18)</sup>。

尚円王の没後、その子である尚真王(在位1477年~1526年)は、ノロ制度を整備するとともに

1492年に鎌倉の円覚寺を模して首里城の北側に円覚寺を建立して王家の菩提寺とした。七堂伽藍を備えた琉球第一の寺で、仏殿は琉球建築の粋を極め、国宝にも指定されたが、沖縄戦により放生橋を残して全て焼失し、現在は県指定有形文化財になっている。円覚寺の開山は京都五山南禅寺臨済宗の禅僧で、尚泰久、尚徳、尚円、尚真の各王につかえ、沖縄で仏教の振興に尽力した芥隠承琥(かいいんしょうこ)で、1466年には尚徳王の使いとして京都の足利義政への使者になるなど外交の面でも重要な役割を果たしたとされる<sup>25)~28)</sup>。

鎌倉の円覚寺は、1282年に国家の鎮護、禅を弘めたいという願いと、蒙古襲来による殉死者を敵味方の区別なく平等に弔うため、北条時宗が中国・宋より招いた無学祖元禅師によって開山されている<sup>29)</sup>。

伊平屋阿母加那志の繡衣装、尚円王、円覚寺、蒙古襲来などから、元寇史料館が全面に刺繍が施されている13世紀の鎧を所蔵しているとの情報につながり、元寇(文永の役・1274年/弘安の役・1281年)の資料とされる「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍の種類や技法を観察し、琉球古刺繍との類似性などを確認したいと考えた。

### 3. 元寇史料館所蔵「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍技法

#### 1) 「伝・モンゴル型鎧兜」

福岡市博多区にある元寇史料館は(図1)、1904年に設立された「元寇記念館」が収集、陳列していた資料等を整備して、1986年に開館した。当館の「元寇」の説明においては、「当時の日本軍兵士は、重いよろい、かぶとで身を固め、名乗りを上げる個人戦法。それに対して元軍(蒙古、高麗の連合軍)は、軽い服装に集団戦法を用い」と、服装に関する記述がある<sup>30)</sup>。

「伝・モンゴル型鎧兜」は当館2階にある元寇資料室の一角に展示されており(図2、図3)、『全長約168cm 重量12.5Kg(台座含む)元軍のものと伝えられる鎧と兜。鎧の表面は布製で、現在でも鮮やかな龍や唐草の刺繍が見られる。裏面全体には約7cm四方の鉄板が隙間なくあてがわれ、鎧本来の機能をうかがわせる』と説明されている<sup>30)</sup>。

なお、刺繍が施された鎧に関して入手した情報の中には、17世紀の中国の資料ではあるが、背面や内側の金属板の状態、刺繍技法の細部も把握できる画像が掲載されているものがあつた<sup>31)</sup>。

2021年10月30日に元寇史料館で実施した閲覧調査では、資料をガラスケースから出すことや、ガラスケースを開けることもできないとのことで、「伝・モンゴル型鎧兜」の背部は見ることができず、前面と左脇側の一部分について、ガラス越しに目視観察と写真撮影を行った。



図1 元寇史料館の外観



図2 元寇資料室



図3 元寇史料館所蔵「伝・モンゴル型鎧兜」<sup>30)</sup> (転載許諾済み)

## 2) 「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍技法

「伝・モンゴル型鎧兜」の上部から下部の写真を図 4 から図 7 に示す。鎧は、同素材の上衣側と下衣側に分かれた一对の形式で、いずれも前開きとなっていた。金属製の鉾が一定間隔で鎧全体に見られ、前述の「裏面全体には約 7 cm 四方の鉄板が隙間なくあてがわれ」ていることが推察できた。

基布の色は淡黄色で、素材の生成りの色が経時変化したものと思われた。素材は絹もしくは綿などの、いわゆる綿襖甲（綿甲とも）で、織組織は平織であった（図 8）。紋様は、上衣の前中心側に龍が、その周り全体にわたって唐草、雲、文字（「吉」か）などが見られた。それらの紋様は、同室内に展示されていた「モンゴル型兜 3」（図 9, 図 10）の紋様と類似性がみられた。

刺繍糸の色は、青の濃淡、淡緑色、淡黄色、白など数色あり、素材は絹と思われた。撚りは、極甘の片撚り（S 撚り・右撚り）の糸が用いられていた（図 12 の②）。その片撚りは、針運びを繰り返していくときに自然にできる撚りである可能性も考えられる。また、駒取りに用いられている糸は、現状からは金や銀の箔部分は観察できなかったが、その形状から箔は剥離し、もとは金糸もしくは銀糸であったかと思われた（図 15 の⑥）。

刺繍技法には、表 1 および 図 11～図 15 に示すように、日本刺繍で用いるような、①よこ縫いきり（貫き地引） ②たて縫いきり ③ななめ縫いきり ④なり地引 ⑤片駒取り（駒取り 1 回） ⑥駒取り（片駒返し） ⑦上模様縫い（押え縫い） ⑧さし縫いなどがみられた。なお、琉球古刺繍に特徴的にみられる「琉球千鳥縫い」や「本綾織り縫い」は、確認できなかった。

「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍技法には、これまで確認している琉球文化圏にのこる刺繍品のうちの、伊是名島、沖縄本島、奄美大島にのこる 4 資料との類似性が認められた。伊是名島の資料とは、前述の「伊平屋阿母加那志の繡衣裳」とともに保管されていた、刺繍部分が断片的に残っている風呂敷様の角型裂である<sup>7)</sup>。沖縄本島の資料は、製作年代が 1440 年～1516 年（確率 83.4%）の丸型刺繍裂と、製作年代が 1436 年～1486 年（確率 95.4%）の総刺繍大袖衣で、すでに報告したとおり、大袖衣に用いられている紋様が、加賀前田藩が長崎で買い付けたとの明代の刺繍裂と酷似している資料である<sup>9)</sup>。奄美大島の資料は、1609 年の薩摩藩による琉球王国侵攻以前の可能性が高いとされている「龍繡胴衣」（県指定文化財）である<sup>32), 33)</sup>。

「龍繡胴衣」はじめその他の奄美地域にのこるノロ資料等の現地調査は、2012 年 11 月 15 日～22 日に実施したが、調査結果は一部の機関や関係者への報告および講演等にとどめているため、刺繍に視点を置いて、稿を改めて発表したいと考えている。

表 1 元寇史料館所蔵「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍技法

No.	刺繍技法の名称
①	よこ縫いきり（貫き地引）
②	たて縫いきり
③	ななめ縫いきり
④	なり地引
⑤	片駒取り（駒取り 1 回）
⑥	駒取り（片駒返し）
⑦	上模様縫い（押え縫い）
⑧	さし縫い





図4 「伝・モンゴル型鎧」上衣側の頭部から肩・胸部分



図5 「伝・モンゴル型鎧」上衣側の胸・腹部分





図6 「伝・モンゴル型鎧」上衣側の裾部分



図7 「伝・モンゴル型鎧」下衣側の脚・裾部分



図8 「伝・モンゴル型鎧」の基布（平織）



図9 「モンゴル型兜」



図10 「モンゴル型兜」の紋様部分





図 11 刺繍技法-1



図 12 刺繍技法-2





图 13 刺繡技法-3



图 14 刺繡技法-4



图 15 刺繡技法-5

#### 4. おわりに

本研究では、琉球古刺繍の技法の特徴と系譜を検証する手掛かりを得る目的で、福岡市にある元寇史料館所蔵の「伝・モンゴル型鎧兜」について閲覧調査を行った。その結果、「伝・モンゴル型鎧」にみられる刺繍技法には、現在の日本刺繍でも用いているような、①よこ縫いきり（貫き地引） ②たて縫いきり ③ななめ縫いきり ④なり地引 ⑤片駒取り（駒取り1回） ⑥駒取り（片駒返し） ⑦上模様縫い（押え縫い） ⑧さし縫い などがみられた。それらの技法は、これまでに確認した琉球文化圏にのこる刺繍品のうち、伊是名島、沖縄本島、奄美大島にのこる4資料との類似性があった。すなわち、15世紀の琉球古刺繍は主に神事に、13世紀の元寇時の資料とされる「伝・モンゴル型鎧」は軍服用という、用途上の違いがあり、製作年代も隔たってはいるが、「伝・モンゴル型鎧」に施されている刺繍技法と類似性がある琉球古刺繍技法の6種の、系譜の検証においては大陸との直接あるいは間接的な関りを視野に入れることができるといえよう。

他方で、琉球古刺繍にみられる「琉球千鳥縫い」や「本綾織り縫い」の技法は、「伝・モンゴル型鎧」には確認できなかった。そのことから、これまでの調査同様に、それらの技法は琉球古刺繍に特徴的な技法であるということや、依然としてその技法の系譜は不明で、現時点で最古級の資料であることなどが再確認できた。

今後も継続して国内外での調査研究を進め、琉球古刺繍の技法の特徴とその系譜について明らかにしていきたい。

#### <謝辞>

本研究を進めるにあたり、「伝・モンゴル型鎧兜」の閲覧や写真撮影と本稿への掲載、および、当館発行資料「元寇」からの写真の複写と本稿への掲載をご許可くださいました、元寇史料館に深く感謝いたします。

#### <参考文献>

- 1) 寺田貴子・植木ちか子；「琉球神女衣装の製作について」、沖縄県立博物館・美術館博物館紀要 2、pp. 27-35 (2009)
- 2) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品の調査－仲村家所蔵裂－」、活水論文集 健康生活学部編 53、pp. 51-58 (2010)
- 3) 植木ちか子・寺田貴子・片岡淳；『琉球・沖縄の衣生活概観－遺品の実態調査からみえてきたこと－』、琉球大学教育学部織染研究室、pp. 69-73,84-103 (2010)
- 4) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告－本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に－」、琉球大学教育学部紀要 79、pp. 61-75 (2011)
- 5) Takako, TERADA; “Sea Snail Purple in Contemporary Japanese Embroidery”, Textile Society of America, pp. 1-8 (2011) 電子出版
- 6) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；『平成22年度～平成25年度科学研究費補助金 沖縄の服飾および染織技術 研究成果中間報告書』、pp. 4-19 (2011)
- 7) 同上；pp. 1-22 (2011)
- 8) 同上；pp. 27-30 (2012)
- 9) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品：仲村家所有刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 55、pp. 1-11 (2012)
- 10) 寺田貴子・中村俊夫；「沖縄の古衣装の放射性炭素年代」、活水論文集 健康生活学部編 56、pp. 1-11 (2013)
- 11) 井上靖久・梅原敬弘・八木洋一・山本琢磨・池松和哉・寺田貴子；「琉服のDNA型鑑定」、活水論文集 看護学部編 1、pp. 41-42 (2013)

- 12) Takako TERADA; Historic Embroidery Costumes and Textiles related to Noro Priestesses in the Ryukyu Islands, Kwassui Bulletin Faculty of Wellness Studies 57, pp. 23-32 (2014)
- 13) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子;「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告 本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に」、『「沖縄の服飾および染織技術の非破壊的分析のデータ構築」報告書 1』、科学研究費基盤研究B、pp. 55-76, 112-115 (2015)
- 14) 寺田貴子;「琉球文化圏に伝世する刺繍品：沖永良部島森家伝世 15 世紀刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 58、pp. 51-60 (2015)
- 15) 寺田貴子;「琉球文化圏に伝世する刺繍品：伊是名島名嘉家旧蔵 15 世紀総刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 60、pp. 39-46 (2017)
- 16) 寺田貴子;「琉球文化圏に伝世する 15 世紀刺繍品の検証に向けてーグアテマラの儀式用刺繍布パヤに関する現地調査ー」、活水論文集 健康生活学部編 61、pp. 1-17 (2018)
- 17) Toshio Nakamura, Takako Terada, Chikako Ueki and Masayo Minami; 'Radiocarbon dating of textile components from historical silk costumes and other cloth products in the Ryukyu Islands, Japan', Cambridge University Press, (2019) 電子出版
- 18) 寺田貴子・下山進・下山裕子・大下浩司・與那嶺一子・篠原あかね;「琉球王国文化遺産集積・再興事業における琉球古刺繍の復元」、沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要 No.13、pp. 85-108 (2020)
- 19) 寺田貴子;「15 世紀琉球古刺繍の検証に向けてー北海道にのこる北方民族ウイルタの刺繍ー」、活水論文集 健康生活学部編 64、pp. 109-124 (2021)
- 20) 寺田貴子;「琉球文化圏にのこる 15 世紀の刺繍品ー久米島のノロ衣装にみられる刺繍技法の特徴ー」、久米島研究会講演資料 (2021)、久米島研究会誌 9 号掲載決定 (2022)
- 21) 下山晃;『毛皮と皮革の文明史ー世界フロンティアと略奪のシステムー』、ミネルヴァ書房、p. 379 (2005)
- 22) 坪井清足・平野邦雄;『新版古代の日本 第 9 巻 東北・北海道』、角川書店、pp. 508-511 (1992)
- 23) 島袋源七;『女官御双紙 (上巻)』(写本)、琉球史料研究会、p. 22 (1958)
- 24) 『伊是名村名嘉家の旧蔵品の解説書ー伊平屋の阿母加那志の衣装・諸道具ー』、伊是名村教育委員会、p. 17, 21 (2010)
- 25) 文化遺産オンライン; 円覚寺跡  
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/192282> (2022 年 2 月 17 日)
- 26) 文化庁・国指定文化財等データベース; 円覚寺跡  
<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/401/3026> (2022 年 2 月 18 日)
- 27) 那覇市観光資源データベース; 円覚寺跡  
<https://www.naha-contentsdb.jp/spot/631> (2022 年 2 月 17 日)
- 28) JCC web 美術館;【琉球王家の菩提寺を創建】 芥隠承琥 (かいいんしょうこ) ?~1495 年  
<http://art.jcc-okinawa.net/rekishi/GreatMan/index.php?name=%E8%8A%A5%E9%9A%A0%E6%89%BF%E7%90%A5> (2022 年 2 月 17 日)
- 29) 鎌倉円覚寺; [https://www.engakuji.or.jp/about/#about\\_01](https://www.engakuji.or.jp/about/#about_01) (2022 年 2 月 17 日)
- 30) 元寇; 元寇資料館、pp. 1-23 (2019)
- 31) MANDARIAN MANSION, ANTIQUES; GALLERY ITEM “17<sup>th</sup> century armored vest”,  
<https://www.mandarinmansion.com/item/17th-century-armored-vest> (2022 年 2 月 17 日)
- 32) 奄美大島のノロ関係資料;  
[https://www.pref.kagoshima.jp/ba08/documents/5897\\_20120228160559-1.pdf](https://www.pref.kagoshima.jp/ba08/documents/5897_20120228160559-1.pdf) (2022 年 2 月 18 日)
- 33) 下野敏見;「ノロの衣裳と祭具ー奄美の龍繡胴衣, 他ー」、比較民俗研究 20、pp. 94-108 (2005)